

## 「御製」という危うさ 内野光子

本書は、昨二〇一八年一月からの新聞連載をまとめたものである。主に平成天皇夫妻の、ときには他の皇族の短歌を対象に、毎回一首を取り上げ、六三首の時代背景や天皇家の内情も交えながら、その意を読み解き、鑑賞している。著者は、二〇〇四年以来「歌会始」の選者を務め、天皇夫妻の歌を「御製・御歌」と呼び習わすスタンスは一貫している。改元により歴史を区切り、「平成」を回顧し、新しい時代をもたらすかのような風潮が根強いさなかでもあった。

「あとがき」では「(両陛下が) どのように国民に寄り添おとしてこられたのか、そのお気持ちのもっとも大切な部分は、じつはお二人のお歌、短歌のなかにこそ籠められていると言っても過言ではない」とも記す。まさに現代の「御製謹解」書なのかもしれない。

平成の天皇夫妻は、「象徴」の何かを探りながら、法令に定めのない「公的行為」の領域を広げ、海外、被災地、福祉施設などの訪問や戦地への慰霊の旅を続けてきた。訪問の先々での歓迎の笑顔や日の丸、感動や感謝の涙は報道されても、被災地の復興や弱者の差別改善が加速するわけでもない。夫妻の個人的な思いとは別に、結果として、政府の施策の遅れや無策への批判をかわし、慰謝する役割さえ担ってきたと言えよう。

憲法上の人権保障、平等主義になじまない「象徴天皇」制が、広く定着し、親しまれているからと言って、現代の差別や格差の根源になっていることも忘れてはならない。

「父<sup>ま</sup>在<sup>い</sup>さば如何におぼさむベルリンの壁崩されし後の世界を」(二〇〇九年)は、平成天皇の歌だが、沖縄訪問を果たせなかった昭和天皇の沖縄<分断>への無念さに繋がる思いまでも読み取ろうとする。<分断>の根源たる「沖縄メッセージ」には触れない。御製をめぐる「物語」の拡散が危ぶまれる。(『現代短歌新聞』2019年9月号所収)